

博士論文審査要旨

論文審査担当者

主査	明星大学教授	齋藤政子
副査	明星大学教授	樋口修資
副査	明星大学教授	張曉瑞
副査	静岡大学名誉教授・名古屋芸術大学名誉教授	金田利子

申請者氏名 浅井 直子

論文題目 「国際結婚」と外国人母の日本への適応行動に関する研究

(論文審査の結果の内容)

本研究は、「国際結婚」の定義の問い直しや歴史的考察を踏まえたうえで、外国人母の語りを丹念に分析することによって、外国人母たちの人生を「語り＝言語」から考察していくという解釈的アプローチによる研究である。日本社会への適応を果たした外国人母たちは、適応へのプロセスの途上で、共通する経験・行動・思考・価値観などがあるのではないかと、というリサーチクエスションのもと、4人の外国人母たちが日本で経験した自身の半生についての「語り」を分析し、外国人母4名の「日本への適応プロセス・フレームワーク」を構築することを本研究の目的としている。

本研究は、二つの分析視角に基づいており、それぞれの問題が解き明かされている。

第一の分析視角は、「国際結婚」の定義と、日本人の「国際結婚」の歴史、日本で生活する外国にルーツを持つ人々の生活と子育てについてはである。これについては、第1章で詳しく分析されている。特に第4節・第5節では、外国人妻たちが日本での生活にさまざまな困難を抱え生きていることを論じている。

第二の分析視角は、「当事者の視点」で外国人母の日本の社会における人生の経路（プロセス）を分析しようとした点である。この点については、第2章で述べた方法論に基づき、第3章以降で分析・考察されている。

第2章では、研究協力者の抱える現実をどのようなものとみなし、どう認識するかという研究の構えを明確化するために、「語り」から現れてくる現実を分析する方法論について説明している。また、GTA（グラウンデッド・セオリー・アプローチ）とTEA（ティー）という二つの質的分析法についても説明がされている。GTAには、いくつかあるが、本研究では、データのリッチさによって切片の大きさを変えることが可能なストラウス版を採用し「データ分析の流れ」に従って「理論的飽和」までの分析を行っている。

第3章・第4章・第5章では、ストーリーラインに対する考察が行われ、最終的に「中国人母2名の日本への適応プロセス・モデル」と「フィリピン人母2名の日本への適応プロセス・モデル」の2つを統合した「外国人母の日本への適応プロセス・フレームワーク」を作成している。外国人母の語りをGTAで分析した結果、日本語習得への意欲、日本社会への向き合い方、子どもへの教育観など多くの共通点が見い出され、外国人母が日本社会に適応していく際の行動や価値観が浮き彫りになった。

第6章では、切片化した下位カテゴリーに対してTEAを使用し分析を試みている。TEAは、人間を開放システムとして捉える点、時間の流れを捨象しない点に特徴があり、個々人の生きてきた時間を重視しながら、ある人生の契機と、もしかしたら可能であった人生のすべての径路に光をあてようとする手法である。GTAで得られた外国人母たちの「ストーリーライン」を、TEAを用いて再分析することにより、「フレームワーク」の有効性が補強され、また、昨年度提出された論文では、見えなかった「獲得と喪失」、「成長と衰退」、「充実と苦悩」などの人生の多様性、複線性が浮き彫りになったと考えられる。

本研究のもつ学術的かつ社会的意義は以下の3点である。

第一に、本研究は、「国際結婚」の一般的な定義を問い直し、“インターマリッジ”の構造化を行いつつ、位置づけを行ったことである。そのうえで、異人種・異民族間での結婚は、グローバリゼーションの中で必然的に異文化間での結婚とほぼ同様の扱いを受けており、多くの論文の中で明確な区別がされていなかったことを明らかにしている。

第二に、本研究では、日本人男性と結婚した外国人女性の語りから異文化適応行動の全体像を描出し、文化適応への壁や葛藤、そして適応を促す要因を浮かび上がらせたことである。

先行研究は、外国人女性たち支援の対象としてみる具体的実践的な研究がほとんどで、「当事者」の視点から詳細なライフヒストリー研究を行ったものはない。本研究では、「支援者—非支援者」という枠組みではなく、「当事者」の視点から、外国人母の詳細な語りを分析し、異文化適応のプロセスを描出した。ここに本研究の新奇性の高さがある。合計で22万字という膨大なデータのリッチさに支えられ、追加面談によってデータの信頼性を確かめている。ナラティブ・テキストの深部にある意味構造を浮き彫りにしようとする際、その信頼性・妥当性は「当事者」との深い対話によるほかはなく、本研究ではそれが行われ、「日本への適応プロセス・フレームワーク」の創出が可能となったといえる。

第三に、第6章で行ったTEAによる分析で、外国人母の人生の径路の多様性・複線性を描出し、彼女らの人生の径路を「阻害・抑制する要因」と、「促進・後押しする要因」とを明らかにしたこと、さらに、人生の径路でどのようなサポートが必要なのかを明示し提言に結実させたことである。外国人母の適応には「言葉の壁」を乗り越える支援だけでなく、日本人の中に根付く「単一文化主義」「差別意識」「多様性への無理解」などを払拭していく努力が必要なこと、そして、母である外国人女性を支えているのは「園や学校」という場や教師・保育者であるという事実を明確にした。ここに、本研究の社会的意義があると考えられる。外国人労働者が急増する日本の今日的状況からみても、外国人母への支援のあり方に示唆が得られたことは大きい。

また、本研究では、今後の研究課題も浮かび上がった。一つは、本研究では日本社会の中で充実感を得て生活している外国人母を研究協力者としたが、日本社会に適応できず自国に戻った母親に対するインタビューでも6章で挙げられた阻害要因・促進要因は人生の分岐点に影響を与えたかどうかを確認する課題、もう一つは、日本人が外国で結婚し母となった場合でも同様の結果が得られるかを検証する課題である。もちろん、本研究は、解釈的アプローチによって、経験の形の多様性を描き出すことが目的の研究であって、モデルの一般化を目指すものではない。しかし、外国人母の人生の径路において何がどのように関わっているのかというテーマは、今日的課題であるだけに、今後、ぜひ教育学的見地から、さらなる奥深い考察と研究の発展を望みたい。

外国人労働者が急増する日本の今日的状況からみても、外国人母への支援のあり方に重要な示唆が得られたことは大きく、本研究は、日本人と外国人母との国際結婚に関する研究の中で当事者視点に基づいた質的研究として新しい分野を切り開いたと考えられる。

よって、本研究は博士（教育学）の学位を授与するに十分価値あるものと認める。

（試験および試問の結果の要旨）

試験および試問では、予備審査等で論文の修正・補強が求められていた以下の点について、説明・質疑が行われた。

1. 本研究の独自性や意義と論文が社会に貢献することについて
2. 質的分析の方法としてGTAやTEAを採用した理由の明確化
3. カテゴリーが生成されたプロセスを図の中に埋め込むこと
4. 引用した文献（和文・英文双方）の妥当性と引用の仕方

これらについては、前述したように論文にも明記され、説明がされた。したがって、これらの内容を慎重に審査した結果、合格と判定した。